

アウグスティヌス『告白録』 冒頭の言葉 *magnus* の解釈

宮谷 宣史

1

アウグスティヌスは『告白録』を *magnus* という言葉で始めている。一般に書物の最初の言葉は重要であるが、アウグスティヌスの場合、この点が明確に意識されているので特に注目に値する。たとえば、彼は晩年にそれまでに執筆した自著の内容、表現、思想などを検討し、場合によってはそれを訂正、修正するために『訂正録』ないしは『再考録』(Retractationes) という作品を書いている。本書で各書ごとにコメントを加えた後で、この本は次のように始められている (Hoc opus sic incipit)、つまり、書き出しはこうである、と明記し、冒頭部分を引用して示している。たとえば、聖書解釈の規則を論じた『キリスト教の教え』では、「ある種の規則がある」(Sunt praeceptae quaedam)⁽¹⁾、人類の歴史における神の国を主題とした『神の国』では「栄光に満ち溢れる神の国を」(Gloriosissimam civitatem dei)⁽²⁾、そして自伝的著作『告白録』の場合には、「偉大なるかな、主よ、あなたは」(*magnus es domine*) となっている⁽³⁾。このような書き方は、書物の表題が明確ではなかった時代の、著作についての習慣的な表示の仕方でもあるが、それでも、これらの例から伺えることは、ある意味で、アウグスティヌスの場合、著作の最初の行が、その作品の意図と内容、あるいは全体を示すものとみなされていることをあらわしているといえよう。しかも、『告白録』の場合には、その冒頭の箇所に、*magnus* という言葉が2回用いられているので、一層注意を引き付けられる。

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

そしてじっさい、『告白録』の冒頭部分には本書全体にとっての基本思想が表明されているという認識から、すでに多くの研究がなされている。われわれも *magnus* に注目して、改めてこのことを検討してみたい。それは、この言葉の重要性が指摘されているわりには、その解釈がまだ十分になされていないからである。

はじめにこの主題に関する最近の研究について簡単に触れておきたい⁽⁴⁾。

荻野弘之がこの箇所について探究の構図という視点から論じ、*magnus* の重要性にふれている⁽⁵⁾。しかし、彼は多くの人と同様、これが詩篇からの引用であることと、韻をふんでいることに言及するのみで、内容とその意義については何ら特別な検討を加えていない。

加藤武はこの箇所の試訳と解釈を試みながら、何故かこの冒頭の言葉の意味については述べていない⁽⁶⁾。加藤信朗は、第1巻1章の研究のなかで、*magnus* に関して「主の存在のあり方を言い表わす」「宗教の根源的語としての大」とみなし、その重要性を適切にのべている⁽⁷⁾。しかし、それがどのような主の存在を示し、またどのような意味で大なのか、については説明していない。論文の表題に「大なるもの」と掲げながら、その語と内容に関しては考慮していないのはどうしてであろうか。

荒井洋一も冒頭部分について詳しく考察し、しかもこの箇所は「呼びかけ」であると強調している。しかし、その呼びかけの最初の言葉 *magnus* については何ら論じていない⁽⁸⁾。

外国の研究についても少し取り上げてみる。まず、F. ピッツォラートは、この箇所に本著作の中心が主であることが明示されていること、それを *magnus* で言い表していると記す。ところが、その理由を挙げることなく、ただこの語が修辞学と関係している点を指摘するに止まる⁽⁹⁾。J. オドネルは、最初の「この2行は告白全体を含む」と述べながら、それがどういう意味なのかを検討することなく、その関連箇所として詩篇とトビア書を引用するのみである⁽¹⁰⁾。

以上取り挙げた例からわかるように、『告白録』冒頭部分に関しては、その

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

重要性が指摘されながら、その解釈が十分でない状況にあるといえよう。私自身、以前にこの箇所に関する研究を公にし、そのなかで *magnus* の意味についてはある程度述べたことがある⁽¹¹⁾。しかし、そこではこの語の意味に多少ふれているが、その背景と意義については検討が不十分であるため、今改めて論じることにしたい⁽¹²⁾。

2

『告白録』は次の2つの文章で始められている。

*magnus es, domine, et laudabilis valde:
magna virtus tua et sapientiae tuae non est numerus.*

アウグスティヌスが『告白録』冒頭の言葉として *magnus* を選んだ理由は何か。また彼はこの語で何を言い表そうとしているのか、これを探り、*magnus* の解釈を試みるのがわれわれの課題である。

まずこの語を含む最初の2行が旧約聖書の詩篇から採られていることは確かである。典拠としては、すでに指摘されているように、

Ps.47,2a: *magnus dominus et laudabilis valde...*⁽¹³⁾
Ps.95,4a: *quoniam magnus dominus et laudabilis nimis...*
Ps.144,3a: *magnus dominus et laudabilis valde...*
Ps.146,5: *magnus dominus noster,*
 et magna virtus eius,
 et intelligentiae eius non est numerus.

また、ドビア書との関連も考えられる。

Tob. 13.1 *magnus es domine in aeternum.*

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

アウグスティヌスの文章と聖書との関係、特に『告白録』と詩篇との文体上及び内容と構成面での関連性についてはすでに多くの研究がなされているので、ここでは立ち入らない⁽¹⁴⁾。また、私もこの箇所におけるアウグスティヌスの文章と詩篇の言葉を比較しながらその意味に関しては、先に言及した論文で検討したことがあるので⁽¹⁵⁾、ここで扱う必要はないであろう。ただ、アウグスティヌスが詩篇の言葉をそのままではなくて、例えば、主格の *dominus* を呼格形に変えていること、また、3人称の文章を2人称に変えていること、それにより主への呼びかけ、告白の姿勢と、主と告白者の関係を直接的で、深いものに行っている点は重要なので、改めて指摘しておきたい。なお付け加えるべきで更に重要なのは、*magnus* を解釈するにはこの箇所と聖書の関係にふれるだけで済ますべきでないという点である。何故なら、『告白録』では、主に対する呼びかけとして、*vita*, *veritas*, *amor*, *salus*, *dolce* など、詩篇から採られた表現が他にも多く用いられているからである。そしてこの場合、主として名詞がおおく、したがって神の本質を端的に表現しているといえよう。しかし、繰り返しになるが、問題は、アウグスティヌスが主への最初の呼びかけの言葉として、形容詞を用い、しかもそのさい、何故 *magnus* を選んだかということである。この点に関して、以下いくつかの面から考察してみたい。

3

はじめにこの語を当時の歴史的状況から解釈してみよう。

まず検討するべきは、宗教史的な背景である。神に対して「大いなるもの」、「偉大である」という表現を用いるのは、旧約聖書だけではない。古代ギリシャで神への呼びかけとして *μέγας* を用いていた。たとえば、エペソの女神、アルテミスに向い「偉大なるかな (*magna*)」と信仰告白的な歓呼の叫びを挙げていたことが知られている⁽¹⁶⁾。また、神の能力の偉大さを言い表すためにもこの語は使われている⁽¹⁷⁾。さらに、この語が神の偉大さのためだけではなくて、それを語るものの罪の告白とも関連して使用されていることも興味深い⁽¹⁸⁾。このような意味で *magnus* を使用した例は、小アジアやバビロニア

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

の碑文にも見られる⁽¹⁹⁾。ローマでは、皇帝が「偉大なるもの」とみなされていた。キリスト教界で高位聖職者に対してこの語が用いられるようになったのは⁽²⁰⁾、この伝統の影響といえよう。

とにかく、アウグスティヌスが『告白録』の冒頭で、*magnus* という語を選び、この語によって神への呼びかけを始めるとき、彼は、単に聖書との関係だけではなく、この語の一般の宗教的な用法を承知していたといえようし、またこの意味では神への呼びかけとしてこの語は人々に理解されやすいものでもあったであろう。ただ問題は、アウグスティヌスが *magnus* を用いて神の偉大さを告白するとき、どのような意味で偉大と考えていたかである。この点については後でふれる。

次に、*magnus* の歴史的な背景として、修辞学との関連が考えられる。修辞学では発見ないしは着想論 (*inventio*) のなかの立証 (*argumenta*) と描写ないしは叙述 (*narratio*) の分野でこの語が使用される⁽²¹⁾。たとえば事柄 (*res*) あるいは人物 (*homo, persona*) に関して、それらの素晴らしさ、偉大さを立証するさいに *magnus* でもってそれを表す。特に、その人物の力 (*potestas, virtus*) の偉大さをいきいきと描写するさいに、また、その偉大さを自らとの関わりで述べ、それを経験して知っているという態度で説得的に語る場合に、援用されるのがこの *magnus* である⁽²²⁾。修辞学教師として長年働き、当時の社会で成功を収めたアウグスティヌスである。彼が *magnus* を自伝的著作の冒頭に書き記し、これにより神への呼びかけを始めようとするさい、修辞学教師としての経験から、この語の意味することを明確に意識しており、またそれゆえにこれを選んだに違いない。しかも、まさにこれが聖書でも使用されている言葉であり、意味も共通性を有していることは、その選択の適切さおよび有効性をアウグスティヌスに感じさせたと言えるであろう。

4

われわれはアウグスティヌスが *magnus* を『告白録』の冒頭で使用する言葉として選択している理由をその歴史的な背景から探してみた。そして、彼が

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

この語の選択と筆記のさいに意識していたことを理解しようと試みた。そこで、この用語の歴史的な背景およびそこで意味されていたことをふまえた上で、次にわれわれは、アウグスティヌスが *magnus* という言葉で何を言い表そうとしていたのか、つまり、この語の内容の考察に移りたい。主が *magnus* であるとはどういうことを指すのであろうか。これを明らかにするために、まず『告白録』自体のなかで、この言葉がどのような意味で使用されているかを検討してみよう。

magnus の一般的な意味での用例からみていくと、たとえば、海の広大さ、天地と宇宙の素晴らしさを表すなど、自然の偉大さを示すために使われている⁽²³⁾。人間の業と能力について、たとえば、ローマ帝国の強大さ、学問と記憶力の偉大さなどを表すためにも用いられている⁽²⁴⁾。学問の素晴らしさについては、たとえばその理由として、哲学は真理と知恵に関わるからである⁽²⁵⁾。また、記憶は様々なことを意識の中に貯えている大きな宝庫で、しかもそこから必要に応じてあるものを想起させる力を備えているからである⁽²⁶⁾。さらにまた、記憶において人間は神とも関わるからであるとも言われている⁽²⁷⁾。

神に関する用例ではその存在と業の偉大さを指す場合が多く、神のみが *magnus* であると強調される。アウグスティヌスによると、神はその本質において、存在そのものにおいて善であり、美であるゆえに、偉大である⁽²⁸⁾。次に注目すべきは、神の力 (*virtus*) が偉大であると強調されている点である⁽²⁹⁾。アウグスティヌスにおいて *virtus* は、神の大いなる業、奇蹟を指す言葉である。これは聖書における用法及び意味と同じで、神の偉大なる業とそれをなす神の力をさす⁽³⁰⁾。では、神の偉大な業とは何か。

アウグスティヌスは、神は人間性を取られたゆえに偉大であると言う。そしてそれを次のように説明する。人間は肉となった神、キリストを通して、道であり、言葉である方を通して神へ至ることができる。つまり、神は人間との関係を持つ存在になってくださったがゆえに、偉大である。偉大なる神はこの受肉を受け入れる謙虚なものに神を探究させ、またその人に近づく方である。また、神は憐れみによって罪人を憐れまれるゆえに偉大であるとも理解されてい

る⁽³¹⁾。

この関連で、第1巻の冒頭部分で、第一の文章で主よ、あなたは偉大です、と呼びかけ、続く文章で、主の力が偉大である、と告白されていることを考えると、1行目では、神の存在の偉大さが、2行目では、神の業を為す力の偉大さが表明されていると解釈できる。そしてその意味するところも明らかになる。つまり、主は受肉され、人間と関係をもたれたがゆえに、その存在は偉大で、また、神は、罪人を憐れみによって救われるので、その業の力は偉大なのである。

次に、人間について *magnus* が適用されるさいには、否定的で、人間は偉大ではない、という仕方で行われる。アウグスティヌスによると、人間は偉大ではなく、罪人である⁽³²⁾。また、人間は多くの大きな病をもっている。ところで人間は偉大な神のみ名を称えることができると、アウグスティヌスは言うが、罪人である人間は偉大なる神とどのようにして関わりをもちうるのだろうか。それが受肉に関わることはすでにふれたが、別な面については、あとでまた取り扱う。

次に関連箇所として興味深いのは、第6巻7章11である。ここでも、神の力 *virtus* が *magna* であると記されているからである⁽³³⁾。アウグスティヌスにおいて、*virtus* は、神の奇跡、大いなる業をしめすために用いられる。また、これと全く同じ意味で *magnus* の名詞形 *magnalia* という表現も用いられることがある。ここで注目すべきは、*magnalia* はギリシャ語の *μεγαλεία* に当り、*virtutes* は *δυνάμεις* にあたるので、聖書の表現との関連を思い起こさせる。たとえば、使徒行伝2. 11; ガラテヤ3. 5; マタイ7. 22; ルカ7. 13などをみると、*virtutes* (*δυνάμεις*) は神の不思議な業をなす力とその業をさし、*magnalia* (*μεγαλεία*) はそのような神の奇跡を行う偉大さを表している⁽³⁴⁾。アウグスティヌスは告白録の冒頭で、主は *magnus* であり、主の力は *magna* である、と *magnus* を2回繰り返しているが、この *magnus* の意味は次のように理解できるのではなかろうか。すでにふれたように1回目は、主そのものの偉大さ、つまり、主の存在の偉大さ、2回目は、

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

主の力と業の偉大さ、つまり、主の働きの偉大さをさしていることが、ここでも解る。しかし、それでも、このような主の偉大さとは何か、をさらに検討する必要がある。しかもこれは、先に言及したように、罪人なる人間が、いかにしたら偉大なる主を、また主の働きの偉大さを告白できるのか、という問題にも関わるゆえに、重要な点である。

5

罪人なる人間が、より厳密には、アウグスティヌス自身が、神を *magnus* と告白する可能性と理由は何であろうか。また、アウグスティヌスが、*magnus* という言葉で神を告白するさい、彼はこの言葉で何を告白しようとしているのであろうか。

内容的には今までの叙述でかなり明らかになっているが、さらにこの問題について、こんどは冒頭部分の文脈を考慮しながら、もう少し突っ込んで検討を加えてみたい。

1. 神が人間を創造したこと、それゆえ、神と人間は、神は人間の創造者、人間は神の被造物、という関係にある。アウグスティヌスが『告白録』の冒頭部分で「あなたはわれわれをあなたに向けて造られた」(*fecisti nos ad te*) と書き、また、その関連で「人間はあなたの被造物の一部」(*homo, aliqua portio creaturae tuae*) と記していることから、神と人間のこのような関係が彼にとり基本的なものとして認識されていることが分る。しかもこの点を彼は『告白録』の冒頭で二度にわたり明示している。そしてまさにこの関係があるゆえに、人間は神の偉大さを告白しようと欲する。つまり、「あなたを讃美することを欲する」(*laudare te vult homo*) と。ところが、人間は罪を犯し、死すべき性を身に負い、神からしりぞけられるべき存在になった⁽³⁵⁾。「しかしそれでも」(*et tamen*) とアウグスティヌスは言う、「しかしそれでも、人間はあなたをたたえることを欲します。あなたの被造物の1部ですから」⁽³⁶⁾ とアウグスティヌスはこの箇所でも強調して繰り返し同じ表現を用いて言明する。

2. 次の点は、神からの働きかけである。神が人間を刺激して、告白させる、とアウグスティヌスはのべている。「あなたはあなたを讃美することが喜びであるように駆りたてます」(Tu excitas, ut laudare te delectet)。excitare とは、呼び覚ます、揺り動かす、焚きつける、駆り立てる、刺激する、という意味である。神が人間を、神は、*magnus* である、と称えるように、告白するように駆り立てる、というのである⁽³⁷⁾。

実は、この動詞は『告白録』第11巻の冒頭に、しかも第1巻と同じ詩篇の引用との関連で用いられている。そこには「それは私が私と本書を読む人々の情念をあなたに駆りたて、みなが『主は偉大です。限りなくたたえらるべきです』というためです」(affectum mecum excito in te et eorum, qui haec legunt, ut dicamus omnes: magnus et laudabilis valde.)⁽³⁸⁾と記されている。この箇所興味深いのは、アウグスティヌスが彼の書『告白録』を読むひとすべて、彼自身と同様に「主は偉大である」と告白することを願っている点である。自ら主によって駆り立てられ、主を告白したアウグスティヌスは、他の人間に向かっても同じ告白をするように、今や彼自身が彼らを駆り立てようとする。そしてこれが、アウグスティヌスが自らの告白を記録した理由、本書執筆の動機でもある。*magnus* という語は、したがって、『告白録』の著者アウグスティヌスにとって意義深いものであるだけでなく、その読者に対しても意味あるものとして、選ばれ、使用されている。つまり、読者に訴えかける言葉でもあると言えよう。本書をひもとく読者は、冒頭で2回も出会うこの *magnus* という言葉に強い印象を受けるのではなかろうか。またその意味について考えさせられるのではなかろうか。そして『告白録』を読みすすむうちに、この語の意味するところをかみしめることになるであろう。

3. アウグスティヌスが主を *magnus* と呼びかけているのは、アウグスティヌス自身が主の偉大さを実際に体験しているからである。この意味で、『告白録』冒頭の言葉は、つまり、主は *magnus* だ、それは私の体験だ、それゆえ私はみずからの体験に即していまから主がどのように *magnus* である

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

かを告白する、という意図がこめられているといえよう。そして、このような態度が先に見たごとく、修辞学における用法の一つでもあったことから、この解釈は当を得ているといえよう。そしてこのことは、『告白録』が、アウグスティヌスの *confessio vitae* でもあることを思うとき⁽³⁹⁾、*magnus* はその冒頭の言葉として、実に適切で、また、意味深いものといえる。

6

では、主は *magnus* である、というアウグスティヌスの体験とは何か。これは、アウグスティヌスが *magnus* をどのように理解しているのか、という問題と関わる。この点をさらに探してみたい。

われわれは先に、この *magnus* という言葉が詩篇から採られていることをみた。このことはよく指摘されるが、しかし、アウグスティヌスがこの箇所の典拠となっている詩篇をどのような意味で引用しているのか、詩篇のなかのこの言葉をどのように理解しているのか、という基本的な問題については、不思議なことに今までほとんど注目されていない。したがってこの点を吟味してみる必要がある。

詩篇95編4節の講解において、アウグスティヌスによると、主が *magnus* であるとは、主イエス・キリストが受肉し、受難したことをさす。その意味は、主は受肉と受難されたことにより、偉大さを明らかにされたからである⁽⁴⁰⁾。この関連で注意すべきことは、アウグスティヌスの *magnus* 理解が、先にふれた一般の用法、たとえば、神の偉大さ、自然の偉大さ、ローマ帝国の偉大さ、高位にある人物の偉大さなどを表す言葉の用法とは異なっている点である。アウグスティヌスによると、主の偉大さは、そのようなものではなくて、むしろ、受肉と受難にある。それは謙遜と自己否定ないしは自己犠牲の態度である。この意味でアウグスティヌスは、主の偉大さが、一般的な偉大さとは異なることを明らかにすると同時に、真の偉大さとは何か、を示そうとしている⁽⁴¹⁾。

詩篇103編36節ではアウグスティヌスによると、主が *magnus* であるとは、主が救い主であるからである。しかも、一般的に主が救い主である、と述べて

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

いるのではなくて、主が私の救い主である、それゆえこの主は *magnus* である、という⁽⁴²⁾。ここから、アウグスティヌスが、詩篇では、主語にあたる主もその動詞も 3 人称で記されているのに対して、『告白録』の冒頭部分では、「主よ、あなたは偉大です」と 2 人称に変えて、主に対して親しく呼びかけ、告白していることの意味も意図も明瞭になる。またこれに続く第 1 巻の序の結論部のなかで、アウグスティヌスが主に対して「私はあなたの救いである」(*salus tua ego sum*) と私の魂に語りかけるようにと、叫び、訴えるように祈っていることもうなずける⁽⁴³⁾。それゆえに、主は *magnus* である、という表現は、アウグスティヌスの個人的な信仰告白にほかならない。この意味で *magnus* は *confessio fidei* と関わる。

詩篇 47 編 2 節では、主はわれわれにおいて偉大であり、われわれも主キリストにあって偉大になる、というように、アウグスティヌスは *magnus* を主と人間に関わらせて解釈している⁽⁴⁴⁾。アウグスティヌスが、主なる神は偉大であるが、人間は罪人であり、偉大ではない、と考えていることは先にみた。では、ここで、罪人であり、無である人間が、キリストにより偉大になる、というのはどういう意味であろうか。アウグスティヌスによると、主は憐れみにより人間を回心させ、再形成し、再生する⁽⁴⁵⁾。この業をなす主は偉大である。

『告白録』を読むと明らかなように、アウグスティヌスは主の憐れみによって、回心させられ、再形成され、また、再生させられた。罪人である人間が、主により、変えられる、新しく造り変えられる、新しく生かされる、人間は主により、変えられる、罪人から神の子に変えられる、これをなす主はなんと偉大なことか、これをアウグスティヌスは経験した。それゆえこの経験に基づき、主が偉大であることを、彼はなによりもまず最初に、叫ぶように、訴えるように、祈りにおいて、自伝において、告白する。したがって、それは、彼にとり、生涯の告白と罪の告白 (*confessio peccati*) であり、信仰の告白であり、これはまた同時に、罪人を救う主の憐れみに対する讚美の告白 (*confessio laudis*) でもある。そして、これが『告白録』という表題の意味であり、また、同時にその内容を示すものであることは明らかである。

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 magnus の解釈

以上の考察から『告白録』の冒頭の言葉、magnus は、単なる詩篇の引用ではなく、アウグスティヌスにより意識的に選ばれ、その中に多くの意味が込められていることが解る。実に magnus は、アウグスティヌスの『告白録』の意図と内容を見事に表現している言葉といえよう。

【注】

- (1) Augustinus, *Retractationes* 2, 4, 2.
- (2) Augustinus, *Retractationes*, 2, 43, 2.
- (3) Augustinus, *Retractationes*, 2, 6, 2.
- (4) 加藤信朗「大いなるもの——アウグスティヌス『告白録』冒頭箇所（1, 1, 1）逐語解の試み——」・『宗教と文化』15（聖心女子大学キリスト教文化研究所編）、1993年、20-21頁、注(1)に、わが国における研究が12点列挙されている。
- (5) 荻野弘之「*Quaerere invocare*—アウグスティヌス『告白録』冒頭における探求の構図—」・『論集』（東京女子大学紀要）、1989.9、1-16頁
- (6) 加藤武「*INVOCARE*—『告白』序章I, 1, 1における—」『中世思想研究』第36号, 1994.
- (7) 加藤信朗、前掲論文、5-6頁。
- (8) 荒井洋一「『告白』冒頭の構造と *invocare*」・『中世哲学思想』37（中世哲学会）、1995.9、35-53頁）。
- (9) J.J.O'Donnell, *Augustine, Confessions*, vol.1, Oxford 1992, p.9.
“These two lines contain a complete confessions.”
- (10) L.F.Pizzolato, *Agostino Confessioni*, vol.1, 1992, p.131.
- (11) 宮谷宣史「アウグスティヌス『告白録』の研究(2)」・『神学研究』26. 1978、36頁以下参照。
- (12) 本論文は、京都大学中世哲学研究会において口頭発表した原稿を書き改めたものである。
- (13) この箇所は、ギリシャ語では、Ps.47, 2a (LXX)、*μέγας ὁ κύριος*、ヘブル語では Ps.28, 2a (Heb.) *יהוה ליהוה* となっており、いずれも主の偉大さを述べている。
- (14) 基本的なものとしては、G.N.Knauer, *Psalmenzitate in Augustins Konfessionen*, Göttingen 1955がある。
- (15) 宮谷宣史、前掲論文、34頁以下参照。
- (16) いわゆる神への感嘆の呼びかけ (*μέγας Θεός*, *μέγας* -Akklamation)

アウグスティヌス『告白録』冒頭の言葉 *magnus* の解釈

である。聖書の中では、たとえば使徒行伝19、27以下、34以下に例がある。